

## 港南区／末武俊康さん一家の場合

住まいは、いつでも新しい生活への期待をふくらませる舞台となる。そこでどんな暮らしが始まるのか、どんな世界をつくっていくのかと。だが、人生の節目、節目に出会う住まいにさまざまな夢を託したくなるのは人情だが、現実はなかなか厳しい。高い家賃にはばまれたりして、住みたいまちに住めない人が多いのが現状だ。

港南区日野にある「リブイン日野」に住む末武さん一家も、そうした夢と現実の乖離に直面した家族のひとつである。

平成元年に結婚した末武俊康さん(70)、寿美代さん(70)夫妻は、ともに南区、港南区に育った浜っ子。俊康さんの職場が港南区内だったこと、住み慣れた横浜に住み続けたいからと、ふたりは港南区、南区内で新



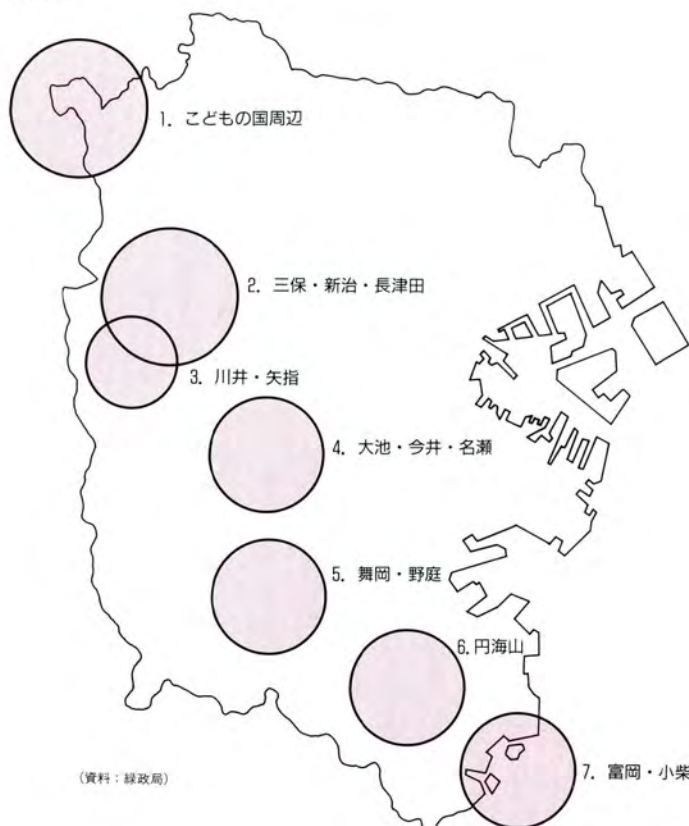
「リブイン日野」で快適生活を送る末武さん一家

居探しを始めた。新生活への夢はふくらみ、はじめは新築の、きれいで、おしゃれなアパートで新しい人生のスタートを切りたいと思ったふたりだが、すぐに厳しい現実にはぶつかってしまった。結婚後も共働きのつもりとはいえ、若いふたりに払える家賃は限られており、駐車場代を含めて月十万の予算では、ふたりの理想の、新築で広く、交通・買い物至便、駐車場付きという物件はみつからず、結局はやや築年数のたった六畳、四・五畳の間で家賃が八万八千円のアパートに落ち着いた。

その後、平成四年七月に長男の俊太君(十カ月)の出産を控え、もっと広い住宅に住みたいと、またふたりは家探しを始めた。しかし、結婚当時と状況は変わらず、思案していたところ、たまたま結婚を控えた友人が他区の「リブイン」に応募する話を聞いた。そこで港南区にもないかと探し、「リブイン日野」に応募してみたのである。このとき倍率は十〜三十倍。とても駄目だろうとあきらめていたら、見事当たってしまった。

同じ年の九月に引っ越してきた末武さん一家の現在の住まいは、三LDK。家賃や共益費など月十七万円弱かかるが、家賃十四万三千円のうち、七万円が市からの補助となり、末武さん夫妻の負担は月に十万円ほどで済んでいる。

■緑の7大拠点



(資料：緑政局)

横浜で生まれ育ったふたりの願いは、大好きなこの横浜に一生涯続けたいということだ。「でも、横浜はどこも家賃が高く、私たちのような若い世代には、このまちに住むのは経済的にとても負担なんです」という末武さん。これからの横浜を支えていく末武さん一家のような若い世代への応援を、行政は今後もしっかりと続けていかなければならない。

「横浜って、イメージがいいでしょう。だから横浜に住んでいるだけで、友だちに十分自慢できるんですよ」と、寿美代さんは笑った。



末武さん一家の新居となった「リブイン日野」のアプローチ